

平成二十六年五月一日発行（毎月一回）日発行 通巻八九一号

火星

平成二十六年五月号



七曜抄 (八)

山尾玉藻

しづまりし松籟孕鹿にこそ

水天をひと舐めしたる鹿の子かな

鹿に鼻押し付けられし春の風邪

花御堂の大きすぎたるをさな佛

甘茶佛背すぢ正しく濡れ在せる
まつ直ぐに雨降る枝垂桜かな
四肢抱ける獣らに散り夜の桜
花冷の養蜂箱に日の射せる
花散り来ひだる地蔵の昼の闇
高野笠野菜の臺の中を来し

太白星

春みかん段々畑に日の余る
トンネル出るたび夏柑の花咲ける
しじみ舟日の出る前に帰り来し
道順をはづれし梅の咲いてをり
オルガンにうたひし春の雪の葬
病める日の朝うぐひすの声聞きし
春の雪体重計に乗つてみる

杉浦典子

浜口高子

十能の炎にはだれ野の闇うごく
息つめて鶴の目を描くしづり雪
梁にさびの浮く槍春の雪
梅にほふ膝を平らにゐてひとり
あいまいな野仏のかほ梅の風
古本の凸凹括る昼蛙
暗がりのふいごに舞ひし春の雪

火星作品

山尾玉藻選

初午の大風落ちし杉の丈八幡大山文子
汐の香に髪重くなる彼岸道
古書店のストーブ匂ふ入彼岸
雪解川渡つてゆきし婚の列
花嫁の父と見てゐる斑雪山
春泥の根岸の路地を迷ひけり
宝塚小林成子
きさらぎの日めぐり反れる子規の部屋
子規庵のひかりの礫こぶしの芽
斑雪野に一步踏み入る旅靴
春の雪柵に掛けあるヘルメット
聖堂に顔の寒くてならぬなり
蘭定かず子
梟や冷めてをりたる鍋のもの
旧正の雨音に溶く酒の粕

寒明の靄上げてゐる雑木山
しんがり頼む梅の闇
逃水やチワワの鳴らす首の鈴
探梅の風にさらはれさうな声
切り髪の毛の床に散らばる目借時
腰痛のひと日うつぶせ囁れる
あててきしパーマの匂ふ春の宵
野施行のけもの道とも窪みとも
新藁の熾に風立つ鬼やらひ
砂舟に朝の段取り鴨帰る
料峭や杉も鳥居も山がかかり
うすべりに縁起ひろげぬ一の午
きさらぎや寄席の幟に風の音
たこ焼の舟膝にある梅ぐもり
滝の上の空の三角余寒かな
鍋底を木杓子の搔く遅日かな
かげろひて飛火野の昼なまぐさし

宝塚山本耀子

神戸深澤鱧

宝塚山田美恵子

選のあとに 山尾 玉藻

雪解川渡つてゆきし婚の列 大山 文子

轟轟とびびく濁流の雪解川に架かる橋を婚礼の列が渡つてゆく。婚礼の列の静々とした動きが、雪解川の荒々しさをいや増す。ローカル色豊かな景を写し取つて春の兆しを伝えている。へ花嫁の父と見てゐる斑雪山へ、娘を嫁がせる父親の心中を黙つておもんばかる作者のこころの色がとても良い。

子規庵のひかりの礫こぶしの芽 小林 成子

辛夷の花芽が空へ向かつて挙り立つ様子を「ひかりの礫」と捉えて鮮やかな印象。子規の庭に春が到来し、へ花籠に皆蓄なる辛夷かなへと詠んだ子規の歎びが伝わつてくるようだ。

旧正の雨音に溶く酒の粕 蘭定かず子

陰暦を重視する農家や漁師と違い、都市で暮らす者が旧正を意識することは殆どない。溶けてゆく酒の粕の穏やかで温かな香が、作者にその意識を呼び覚ませたのかも知れない。

探梅の風にさらはれさうな声 山田美恵子

探梅に出かけたものの風が強く、連れだつ人達の声もいかにも寒そうで頼り無く聞こえたのであろう。「風にさらはれさうな声」の喩えて探梅の頃の寒さを強調した。

新蕈の熾に風立つ鬼やらひ 深澤 鱧

如何にも温かそうな火色を湛えていた新蕈の熾が突然の風に煽られ、ハツとするような美しい焰を上げたのだらう。視感の働いた切り取りで節分会らしいこころの弾みを伝える。

滝の上の空の三角余寒かな 山本 耀子

寒明を待つて滝を訪ねたのだらうがまだまだ寒い筈である。ふと見上げた空の狭い三角形も、作者を一層寒々しくしたのだらう。「余寒」で少し後悔を覚えるこころの内が窺える。

雪やんで昼の文机暗かりし 坂口夫佐子

雪が止むと雪に覆われた戸外の全てのもが青白く白光して浮かび上がり、その所為で家内は一層冷え冷ええとの暗く感じる。作者が向かつていた文机も急に暗くなった様子である。

刃物屋に日差しのかけら麗らけし 高松由利子

普通刃物が店内に並ぶ景を「麗らけし」とは感じない。しかし今、店内に春日が差しこみ刃物がとりどりの光を放つている。「日差しのかけら」は日を受ける刃物らしい感受。

縞馬の縞の乱れぬ寒さかな 涼野 海音

最近へしまうまの縞の潔白冬立てり 上田日差しへに出会つたが、冬は縞馬の縞が際立つのだらう。掲句、縞模様之余りの整然さに圧倒され、少し畏縮した思いが寒さに繋がつたのだ。

風に向き変へし白さのゆりかもめ 松山 直美

一読、ゆりかもめが寒風へ翻り激しく羽ばたいた途端、その白い姿が急に煌めきを増した景が立ちあがる。無駄なことは述べずものを放り出した叙法。俳句の骨法である。

烏賊干しの鉤のびつしり春一番 西村 節子

港に春一番が吹く日、烏賊干し場に烏賊は見られず無数の鉤だけが並んでいる。作者は鉤の多さに目を瞠りつつ、風が落ちてそこに干されるであらう無数の烏賊を思っている。

恒星圈

白数康弘

水槽に眼つぶれてをりし鮎
囀鮎生き生きとして水くらし
鮎を釣る一の瀬二の瀬しらみけり
鮎釣りの竿の穂先は風のやう
白波の川上へ鮎走りけり

飯塚 糸子

高尾 豊子

寒林の夕日薄れてきしホテル
凭れあふセロリと三つ葉夜の厨
宅配ピザ石路の咲く道通り来し
鱻鱻のスープを掬ふお山焼
氷点下より戻りきし格納機

犬ふぐり土手は日当たるところなり
寒肥の絵を描くやうに撒かれあり
印南野の赤土濡るる涅槃西風
末黒野の匂ひや父の膝固し
末黒野や淡路家島を遥かにす

城 孝子

高松由利子

結婚式はじまつてをり天に凧
節分の波ゆるやかな赤穂かな
春近き泥を立てたるどぢやうかな
枝先をゆする鳥影雛の宿
鳥交む法然院のせまき空

金婚や海風余す水仙花
滑走の音の下なる蜷舟
川向うにあり清姫の黒椿
難波津や日永の雲のはねず色
初午や柳わけゆく高瀬舟

獅子座

山尾玉藻推薦

西村節子

引き売りが椿の門に声かけし
春一番豆腐屋の腕ふやけぬる
膝正し春セーターの般若経
立春の夜や白雲のとく流れ

藤田素子

寒明けや手首に赤きミンサー織
レントゲンの我が骨美しき余寒かな
春風に握手さしだす左の手
陽炎を三本脚の犬が行く

井上淳子

連だちて大川のぞく春シヨール
ふんはりと雀の降れる梅まつり
楽屋に入る大きな鞆春の雪
うらおもて受験の絵馬のきゆうくつな

涼野海音

象の鼻青空へ伸び建国日
須磨寺を走り抜けたる恋の猫
春の山越ゆれば不器男生家かな
雨音を聞くかに涅槃したまへる

石井耿太

春氷踏みゆく式辞ふところに
玉垣に浮く紅梅の二三輪
麦青む雨後の輪中のことさらに
兄逝きて雪のふるさとひたまふし

藤本千鶴子

身づくろひの懸想文売あちらむき
早春やクラフトの猫並びぬる
草の芽や行きも帰りも道違へ
くだりつつ馬酔木峠の花馬酔木

湯谷良

亡き夫の表札あふぎ柀挿す
子に持たす厄落し来し金火箸
撫牛の春立つ肩に雀来ぬ
てんのじの森の獣の凍てをらむ